

Der Wind

(風)

湘南日独協会

Japanisch-Deutsche Gesellschaft in Shonan

事務局：〒251-0025 藤沢市鵠沼石上1-1-1

江ノ電第2ビル7F

TEL0466-26-3028 / FAX0466-27-5091

「日独交流 150 周年記念行事」

2011 年は 1861 年日独修好通商条約調印（当時独は北プロイセン）後 150 周年記念の年となります。日本とドイツ両国では様々な記念行事が計画されています。当湘南日独協会が直接間接に関与する予定行事には主に次の様な計画があります。今後逐次詳細をお知らせ致します。会員の多くの皆様の積極的な参加とご協力をお願いします。

2010 年 10 月 16 日(土)

東京横浜ドイツ学園での開会式

2011 年 4 月 14 日(木)

日独協会連合会会員約 60 名がドイツから来訪され横浜鎌倉の観光、その後湘南日独協会会員との交流会を鎌倉で開催

2011 年 4 月 24 日(日)

全国日独協会連合会総会（奈良）

2011 年 4 月 25 日(月)

日独交流 150 周年記念式典（奈良）

2011 年 5 月 9 日(月)

湘南日独協会主催日独交流 150 周年記念

「日独音楽家の集い」演奏会を鎌倉芸術館で開催

2011 年 11 月 3 日 横浜大榎橋ホールでの閉会式

（開会式閉会式はドイツ大使館主催）

ドイツ語講座後期（10 月～3 月）の募集

初級 毎週月曜日 17:45 ～ 19:15

講師 小笠原藤子先生

中級 毎週土曜日 9:30 ～ 11:00

講師 Rebekka Radke 先生

場所 JR 藤沢駅近く

受講料 一般 43,000 円 (20 回)

会員 38,000 円 (20 回)

申込、お問い合わせは以下にお願いします

松野 Tel 0467-32-7300 Fax0467-32-7387

e-Mail matsunoy@kamakuranet.ne.jp

お詫び

本年度（2010 年度）の会費納入につきまして、郵便局との連携に不備があり一部の会員の皆様に大変なご迷惑をお掛けいたしました。ここにあらためてお詫び申し上げますと共に、今後掛かる事態の発生しないよう当協会をあげて取り組んでまいります。宜しくお願い申し上げます。

湘南日独協会の活動予定

■第 70 回例会

日時 7 月 25 日(日) 13:30 ～ 16:00

講師 佐藤 剛志氏 イリス顧問

「維新の証人ドイツ商社—イリス商会の歴史」

今年の NHK 大河ドラマ「龍馬伝」、昨年は横浜の開港 150 年記念、さらに今年は日独交流 150 年記念行事が秋から各地で続きます。昨年横浜美術館で「イリス 150 周年—近代日本と共に歩み続けるドイツ商社の歴史」展が開催され、日経新聞文化欄には「維新の証人ドイツ商社」が掲載されました。この筆者である佐藤氏は、イリス日本法人に勤務され現在は顧問をされ傍らイリス商会の歴史の研究を続けておられます。新たな興味深いお話が伺えるものと思います。

会場 江ノ電第 2 ビル 7 階 湘南アカデミア

会費 1,000 円

■8 月会員懇話会

日時 8 月 28 日(土) 18:00 ～ 20:00

講師 西澤 英男氏 当協会会員ヨーロッパ歴史研究家

「神聖ローマ帝国＝ドイツの歴史を知るキーワードの一つ」

フランクフルト、アーヘン、ミュンスター、レーゲンスブルク、ウィーンなどを気の向くままに歩き回り、この得体の知れない国、神聖ローマ帝国を色々な視点で探ってみました。（講演者談）

会場 江ノ電第 2 ビル 7 階 湘南アカデミア

会費 1,000 円

■71 回例会

日時 9 月 12 日(日) 13:30 ～ 16:00

講師 昔農 英夫氏 東京大学大学院特任研究員

「バイオ燃料は地球を救うか？」

最近石油に代わる燃料として脚光を浴びるバイオ燃料についてドイツの事情も交えて映像を見ながらのお話です。

会場 江ノ電第 2 ビル 7 階 湘南アカデミア

会費 1,000 円

■10 月 3 日(日) 湘南オクトーバーフェスト

詳細は次ページとチラシ

湘南のオクトーバーフェスト

今や湘南の秋の風物詩の一つともなった恒例のオクトーバーフェストを次の要領で開催します。

今年は会場をホテルに変更し10月になりました。早目の予約をお願いいたします。

日時 2010年10月3日(日)
午後6時30分～8時30分

会場 グランドホテル湘南
(藤沢市旭町11)

会費 5,000円

ビール他フリードリンク付

出演 エーデルワイス・トリオ

湘南日独協会混声合唱団アムゼル

詳細は同封のオクトーバーフェストのチラシをご覧ください



■ 7 2 回月例会

日時 11月21日(日) 18:00～20:00

講師 織田 正雄氏 当協会会長

「ベルリンの壁崩壊の前後一年の記録」

現場に立ち会った生々しい証言とDVDの映像による世界に改革をもたらしたベルリンの壁崩壊前後の講演です

会場 江ノ電第2ビル7階

会費 1,000円

■ 12 月例会は例年のように望年会を開催する予定です。

多くの会員の皆さまのご参加を頂き親睦をはかりましょう。

日時、会場等決定次第お知らせいたします。

新入会員紹介

名和 良子 西川 麻里子 敬称略

会員情報

会員木原健次郎氏がドイツ語講座(ラトケ先生)のお仲間3人と「ニーベルンゲンの災い」(原題 Der Nibelunge Not)を翻訳出版しました。藤沢市大庭図書館、横浜市中央図書館、鎌倉市図書館等で貸出可能です。木原さんの電話メール・アドレス: 0466-28-9150 kihara9150@s9.dion.ne.jp

湘南日独協会混声合唱団

アムゼル 団員募集

今年もオクトーバーフェストに出演します

ドイツからの来訪者の歓迎会の演奏、交流音楽会への出演などまた合唱祭への参加と活発な活動をしています。指揮・指導は長年ドイツでも活躍されている声楽家の梶井智子先生

問合せは橋本周也氏 TEL&Fax 0466-23-2509

e-mail ewfwh-k@jcom.home.ne.jp

世界文化遺産都市のスズメたち

ードイツ映画『菩提樹』と

『続・菩提樹』の隠し味ー

会員 宮下啓三

湘南日独協会の12年の歴史のうちに芽生えたものがいろいろある中で、とりわけよこばしいのが、合唱団「アムゼル」の誕生と成長です。音楽好きの会員たちによって結成されたグループが、梶井智子さんの卓越した指導を受けるうちに、おどろくほど歌唱力を成長させました。

この合唱団の名は、ドイツ語の名词であって、「クロウタドリ(黒歌鳥)」などと訳されます。「歌鳥」という言葉の示すとおり、鳴き声の美しい小鳥です。小鳥の名をもつ合唱団がドイツにもあります。その合唱団の歌声が、湘南日独協会の例会における催しにおいて会員たちの耳にとどいていました。

今年早々、湘南日独協会がドイツ映画『菩提樹(原題:トラップ家の人々)』と『続・菩提樹(原題:アメリカでのトラップ家の人々)』を鑑賞する会をもちました。ちょうどその頃、私は劇団四季に依頼されて『サウンド・オブ・ミュージック』の解説文を書いていた。家族合唱団の誕生をテーマとするドイツ映画とアメリカ生まれのミュージカルは、どちらも、トラップ夫人の回想記を土台にして組み立てられています。映画にだけアメリカ到着後の話が付け加わったということ以外、ストーリーがそっくりです。『続・菩提樹』は、一家がアメリカ入国を許された後、経済的な苦境におちいった状況下でとばしいチャンスを生かして評判を呼ぶと同時にアメリカ滞在の許可を得るまでを描きます。『サウンド・オブ・ミュージック』の続編と呼んでよい内容です。

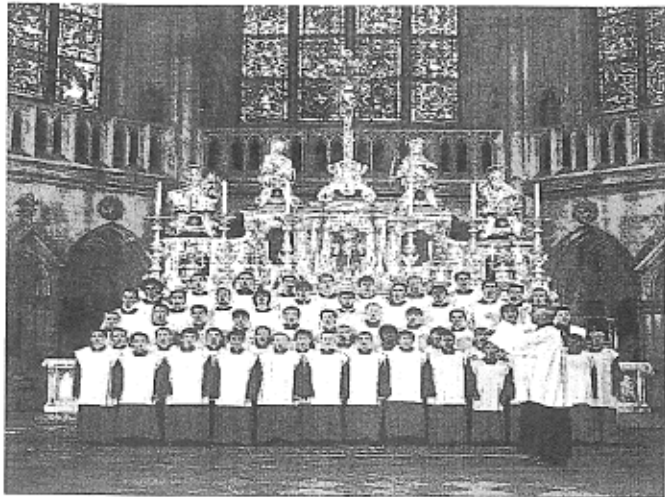
でも、私がこの文をしたためるほんとうの動機は、映画とミュージカルの関係をお話することではありません。じつは、ドイツ映画『菩提樹』の前編と後編の意外な楽しみかたがあるということについて語るためです。



映画におけるトラップ家の合唱の声は出演者たち自身の声ではありません。レーゲンスブルク大聖堂の合唱隊が吹き替えの合唱を担当していました。

レーゲンスブルクはドイツ南部の古都であって、旧市街が世界文化遺産として登録されていて、その中心に立つのが聖ペテロ大聖堂です。そしてこの大聖堂で歌声をひびかせてきたのが「レーゲンスブルクの大聖堂スズメたち(ドームシュパツェン)」という名をもつ少年合唱隊です。

レーゲンスブルクとウィーンはドナウ河で結ばれていますが、男の子たちの合唱隊においても名声をきそいあってきました。映画の『菩提樹』と『続・菩提樹』でトラップ一家の歌声としてお聞きになったのは、じつはレーゲンスブルクのこの合唱隊の声でした。



(レーゲンスブルク少年合唱隊)

ウィーン少年合唱団が15世紀末の誕生であるのに対して、レーゲンスブルクのスズメたちの歴史は、なんと7世紀ウィーン少年合唱団が15世紀末の誕生であるのに対して、レーゲンスブルクのスズメたちの歴史は、なんと7世紀、さかのぼります。長さにおいてウィーンをしのぐ歴史をもつことで知られるレーゲンスブルクの少年合唱隊が歌っていたのだと知った上で映画の中の合唱をお聞きになってみてください。レーゲンスブルクの大聖堂に入った気になって歌声を聞けば、映画を2倍楽しめます。『続・菩提樹』の中でトラップ一家が『ウィーンの森の物語』を歌って、ウィーン出身の大富豪夫人を涙ぐませますが、ヨハン・シュトラウスの名作を歌う声は実はレーゲンスブルクの少年たちの声であったとは、愉快です。うがった見方をすれば、ヒトラー政権とナチズム台頭に苦しめられたオーストリアの家族に対する罪ほろぼしの気持ちをもちたドイツの映画製作者がドイツの最高水準の児童合唱隊の歌声をこの映画にあたえたのではないかと、思えてきます。音楽はしばしば私たちの常識を超える深い意味を含みます。

『ヴァイマル探訪記』

会員 寺田 雄介



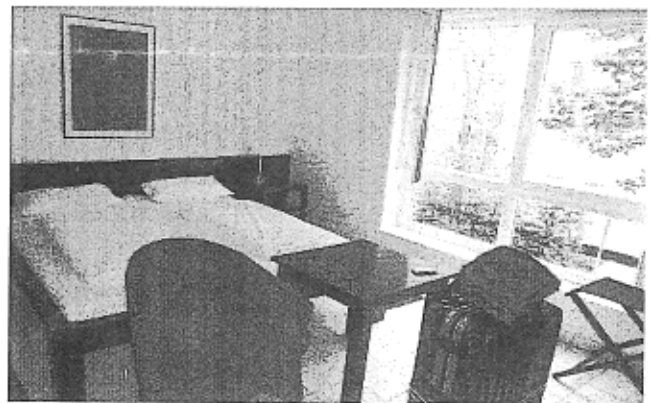
2010年5月7日の朝、肌寒いヴァイマルに到着しました。ドイツの地を踏むのはこれで4回目ですが、この街に来たのは初めてです。

ヴァイマルの中央駅の前は静かで落ち着いた雰囲気。日本の観光地と違い、コンビニも土産物屋も寂れた飲食店もなく、とてもすっきりとしています。ヴァイマル独日協会の理事であり『アートホテル・ヴァイマル』を経営されているゼンゲさんが、自ら車を運転して駅まで迎えに来てくれました。『赤い大きなスーツケースを持っている男性が私です』としかメールをしていなかったのですが、ぶらっとホームからよろよろと降りてくる私をすぐに見つけて、声をかけて下さいました。

駅をあとにして中央広場やゲーテ広場周辺へ移動するに従って、観光客も次第に多くなり、街の賑わいも増して来ました。ゼンゲさんのホテルは街の中心部から少し離れた閑静な住宅地にありました。木陰が涼やかな、まるで軽井沢のような雰囲気の漂うところです。



案内して頂いたお部屋は白と赤を基調としたモダンで清潔感溢れるインテリアでした。おやつ、と目を引いたのは机の上のコーヒーマーカーでした。ドイツのホテルではまず見かけることはありません。それもそのはず、ゼンゲさんが以前来日したときに、日本のホテルの部屋に必ずコーヒーマーカーが置かれていることがとても気に入って、そのアイデアを真似たそうです。廊下には鎌倉の大仏の写真や、『飛翔』と書かれた掛け軸が飾っており、ああ、本当に日本が大好きなんだなあ、と感じました。



翌日はゼンゲさんとイルム川沿いを散策したあと、午後は一人で街を観光しました。ゲーテの家と別荘、シラーの家、リストの家、バウハウス美術館、そしてワイマール城。それぞれご紹介したい素晴らしい点がたくさんあるのですが、それには残念ながら紙面が足りません。そこで、夜に訪れたドイツ国民劇場について、少し触れることにします。

(次号に続く)

5 月例会「講師 吉森賢氏 ドイツ現代史の側面— BMWの 経営戦略」に参加して

会員 三谷喜朗

当日は雨天にも拘らず多くの聴講者を迎える事ができた。吉森さんとは昔、氏が学生のころドイツ語通訳でお世話になって以来、仏、独、英にて長く大学教授されていた此の間にはしばしば仕事で助けて貰って来た仲でした。講演会終了後何時もの如く講師を囲んで難しい話は抜き飲み会となり愉快に夜はふけ散会となった。

BMW (Bayerischen Motoren Werke)の1916年の創立から二輪、四輪、モータースポーツそしてユンカーズのエンジン、V2 ロケット、敗戦間際のジェットエンジン、またミュンヘンの四シリンダー型の本社ビルと話ははずみいよいよ先生の専門分野である企業倫理の話となった。

今日のBMWの企業理念、概念は 短期的目的や収益ではなく長期的価値を向上させること又その価値観は株価や経営指標のみでなく企業での従業員をどの様に処遇するか、社会的責任を如何に果たすかによって評価されるとある。これは第二次大戦後経営環境の変化により1959年経営破綻しメルセデスベンツに合併されんとした時Herbert Quandt (1910~1982)の出資によりその経営を彼に委ねる事となり策定された。それはベンツからの買収を避けベンツと差別化する事であった。今日BMWはQuandt家の盤石な経営による。日本では至る所でBMW車を見かけるが此の事をFahrerはご存知だろうか。またこれからの日本企業はNo. Oneや横並びを目指すのではなくOnly Oneを目指さねばやがて中国にまけると示唆する発言もあった。

<編集後記>

▼会員の皆さまのドイツとの出会い、繋がり等をお聞かせ頂くシリーズ「私とドイツ」の第1回を掲載いたしました。Der Windの続く限り続けたいと考えております。どうぞご協力をお願い申し上げます。

▼宮下啓三先生のご寄稿を頂きました。前号に上原さんの映画「菩提樹」についてのご寄稿に通じるテーマで会員の皆さまには興味深い内容と思います。先生にはこれからも定期的にDer Windへご寄稿頂けるようお願いしたいと考えております。

▼「ヴァイマル探訪記」を7月にベルリン留学へ出発されます寺田雄介さん(理事)に頂きました。ワイマルと記されることに最近慣れていましたが、ヴァイマルと記されると何か懐かしさと新鮮さの両方を感じるの不思議です。留学中には「ベルリン通信(仮題)」をお寄せ頂く予定です。楽しみですね!

▼6月の懇話会「日本酒の話」は大変好評でした。新入の会員・女性会員も多く、皆さん試飲(講師とお世話の大沢さんの選んだ全国の名酒)から大変楽しく、二次会「実践編」でも愉快的な時間を過ごしました。次はワインそしてビールをの声も多く、企画担当者も嬉しい悲鳴です。

▼編集を担当して三号となりました。どうぞご意見ご感想をご遠慮なくお知らせ下さい。

e-mail A-OKUBO1926@ttmy.ne.jp 大久保 明

私とドイツ (1)

「私のドイツへの旅」

会員 林 邦之



(写真はTutzingのブラームス公園の碑と筆者)

明治の末期に医学を学んだ父の書くカルテはドイツ語であった。しかし、戦後になってからは殆どのカルテは英語交じりの日本語になったようだ。医学に止まらず多くの学問が西洋依存から脱し、国際水準に達したということであろう。大学の運動部に入ってビタミン注射をするとき200を2ツエーツエーと言って先輩に笑われた。

大学では欲張って独仏両語を学び始めたが、仏語教師のバリジャンに取りに閉口、「猫は家庭的な動物である。」の一句を覚えてだけでフランスとはおさらば。2年目にシュティフターの「水晶」を教わった。祖母の家に出かけた幼い兄と妹が、帰途雪中の高山で道に迷い一夜を明かす。遠くから響く雪崩の音、夜空を過る流れ星、おののく妹を励ます兄、兄を頼りに何度も繰り返す妹の言葉“Ja, Konrad”.そして幸いにも夜明けとなって無事救出される。冬休みに最後まで読みあげてスキーに出かけた。

小学校の「図工」という科目の成績は「良上」でゆうは取れず。その頃から美術より音楽の方が好きだった。自ずからドイツ音楽、それもロマン派に魅せられて今日に至った。

以上は私が辿ってきたドイツへの道である。そして今。ドイツ・ロマン派へ中でもブラームスに魅力を感じている。ブラームスは気難しく写っている写真のせいか、敬遠されやすいのであるが、じつはそうではなく、一生独身を通しながらも父母や弟と親しく接し、クララ・シューマンを始め多くの女性との交際があったほか、夏にはほとんど毎年旅に出かけている。独逸国内ではBaden-Baden, Bad Ischl, Poertschachなど。国外ではスイス、イタリア、チェコ、オランダ、ハンガリーなど。港町ハンブルクで貧しい幼年時代を送ったためか、船が嫌いである英国には行かなかったが、フランスには足を入れなかったとは興味をそそる。(注: Poertschachのoeはoのウムラウト)

★★ 湘南日独協会のホームページは ★★

URL: <http://jdg-shonan.ciao.jp/index.html>

「全国日独協会一覧」からもアクセスできます。